

第2章 子ども読書活動推進計画策定の背景

1 子ども読書活動の意義

子どもたちは、読書活動を通して言葉を学び、多くの知識を身に付け、深く考える力を付けていきます。また、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かにしていくためにも、読書活動は大変重要です。子どもたちの健やかな成長に、読書は欠くことができないものであり、豊かな人生を送るためにも、なくてはならないものです。

2 国・県の動向

(1) 国の動向

国の子ども読書推進に関する施策の動向をまとめてみると、次のとおりです。

平成11年 8月 平成12年を「子ども読書年」とすることを衆議院・参議院の両院で決議

平成13年12月 「子どもの読書活動の推進に関する法律」を公布、施行

平成14年 8月 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を策定

(2) 神奈川県動向

神奈川県は、国の動向を受け、平成16年1月「かながわ読書のススメ～神奈川県子ども読書活動推進計画」を策定しました。

この計画では、

- 子どもが読書に親しむための環境づくり
- 子どもが読書に親しむための機会の提供
- 子どもの読書活動推進のための体制の整備と社会的気運の醸成

の3本の柱により、子どもの読書活動の推進をめざしています。

具体的な方策としては、

- 家庭・地域における子ども読書活動の推進
- 学校等における読書活動の推進
- 学校・関係機関・団体等が連携した読書活動の推進

を体系化し、今後5年間にわたって県が取り組む子どもの読書活動の推進にかかる施策の方向性や取組内容を示しています。

3 伊勢原市における子ども読書活動の現状

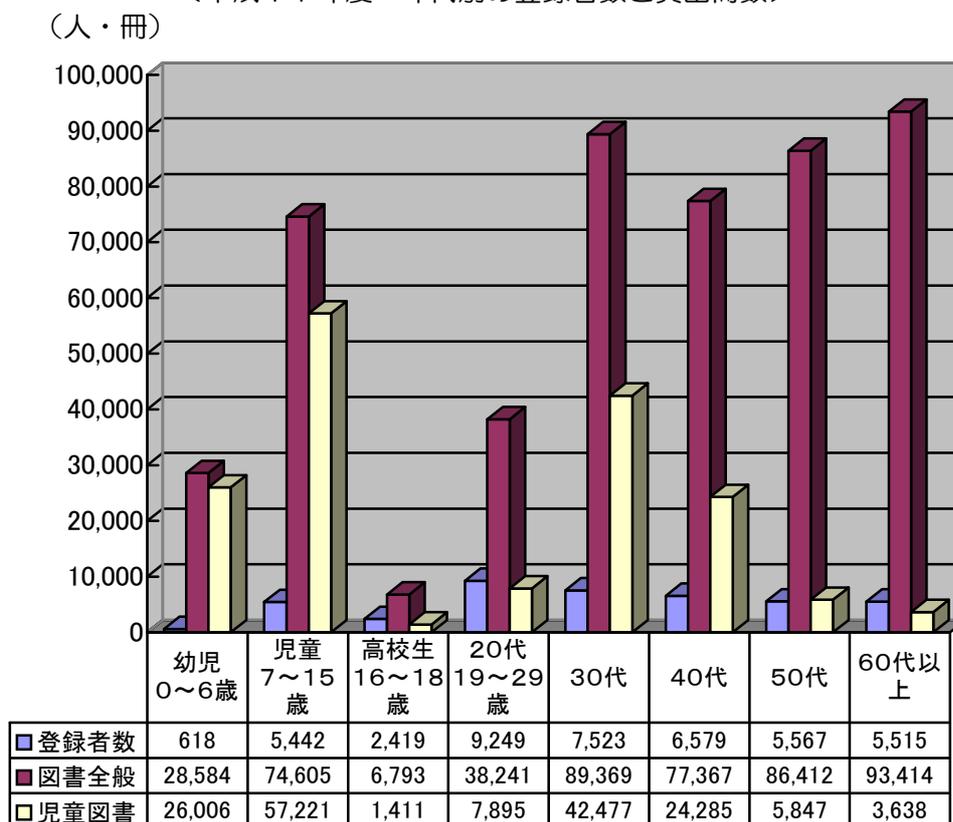
(1) 市立図書館（統計は平成17年度実績）

市内登録者の年代別登録率（年代の登録者数／年代の人口）をみると、幼児（0～6歳）の7%に比べ高校生は67%となっています。これは、平成17年度に5年以上利用のなかった登録者の整理を行っていますが、開館当時の小・中学生に利用者カードを全員配布したことが大きく影響しているとみています。

一方、平成17年度の全登録者を対象とした貸出状況から次のような結果がみえてきます。

- ・ 児童図書の本平均貸出回数を年代別にみると、幼児が6.9回で最も多く、高校生は0.2回と最も少ない状況です。平均貸出冊数でも同じ傾向がみられます。
- ・ 下のグラフで示すとおり、図書全般の貸出冊数が多いのは60歳以上で、次いで30歳代、50歳代、40歳代、児童の順となっています。一方、児童図書の貸出冊数が多いのは、児童、30歳代、幼児、40歳代となっています。

＜平成17年度 年代別の登録者数と貸出冊数＞



この統計からみえてくるものは、幼児・児童を持つ親の世代が積極的に子どもの本に興味を持っていることが分かります。

一方、学校や部活動、友人との時間が生活の多くを占めるようになる高校生は、学習活動で図書館を利用することがあっても、図書貸出にはつながっていないと考えられます。

ふしぎだね 本を読むと 楽しいよ

<平成17年度事業参加状況>

(単位：人)

事業名	参加者数	合計
お話し会		4,668
		2,930
職員		554
ボランティア・サークル		2,376
おはなしばるーん 図書館 出張公演	2,250 1,619 631	
なないろらんぷ	126	
読み聞かせ講座		77
障害者ボランティア育成講座		17
百人一首かるた大会		18
ジュニアセミナー（夏季・冬季）		27
わらべうた会		152
映画会（夏・冬・春休み）		1,020
図書館探検隊（中・高校生）		3
総合的な学習受入れ		154
移動教室		270

図書館は、読書活動だけでなく子どもたちの生涯学習の場としても広く利用されています。

児童書の読書普及活動については、基本図書の整備やおはなし会の実施、特集書架の実施などにより一定のレベルを超える成果をみせているといえます。特に、4月23日の「子ども読書の日」に合わせて実施している「子ども読書フェスタ」では、お話し会などの多彩な催しを通して、広く読書活動の啓発に努めています。

図書館の利用では、市内の未登録者、特に今後の主たる利用者に育っていく幼児への積極的な登録勧誘や利用促進を考える必要があります。

また、高校生を含むヤングアダルト世代に向けては、この年代のニーズにあった資料の収集や魅力のある書架構成に努め、より図書館に親しんでもらえるよう努力していくことも肝要です。

本読めば 夢と知識が君の手に

(2) 学校（統計は市内小学校5年・中学校2年1クラス抽出実施）

平成17年5月に実施された神奈川県「神奈川県子ども読書活動推進計画に基づいた読書についての調査」から、伊勢原市の児童・生徒の読書状況を分析すると次のような傾向がみられます。

項目	小学生の読書傾向	中学生の読書傾向
1か月に読んだ本の冊数		
1～3冊	20%	41%
4～6冊	26%	0%
7～9冊	5%	0%
10冊以上	5%	9%
1冊も本を読まない	44%	50%
本はおもしろくないから	47%	54%
本を読む時間がないから	6%	23%
その他	47% マンガの方が楽しい。他にやりたいことがある。読む気にならない。など	23% マンガの方が楽しい。他にやりたいことがある。どんな本を読んでいいのかわからない。など
1週間の学校図書館の利用日数		
1～2日	15%	26%
3～4日	5%	3%
5日	0%	0%
1日も行かない	80%	71%
1か月に学校図書館で借りた本の冊数		
1～3冊	8%	29%
4～6冊	2%	0%
7～9冊	0%	0%
10冊以上	0%	0%
1冊も本を借りない	90%	71%
1か月に学校以外の図書館で借りた本の冊数		
1～3冊	25%	24%
4～6冊	3%	3%
7～9冊	3%	3%
10冊以上	18%	3%
1冊も本を借りない	51%	67%

この調査からは、中学生になると学校図書館の利用が増加していることがわかりますが、「どんな本を読んでいいのかわからない」といった意見もあります。

また、小学生の44%、中学生の50%が調査された1か月間に本を1冊も読んでいないということが明らかになりました。この結果から、小・中学生が読書に親しむ機会を多くつくる必要があります。

本を読み 心のたねを育てよう

(3) 子育て支援課・保育課

① 子育て支援課

ア 従来から「子育てしやすい社会づくり」のため、各種の子育て支援策を実施してきましたが、平成16年度に「伊勢原市次世代育成支援対策行動計画」が策定され、「いきいき子育て のびのび子育てできるまち いせはら」を基本理念に掲げ、子どもの健やかな成長をめざして保護者への育児支援や育児教育など、母子保健における子育て環境の整備を推進しています。

そうした中で、子育て支援の一環として、平成14年9月より、「すこやか親子ブックスタート事業」を市立図書館との連携のもとに開始しました。この事業は、7か月児健康相談の参加者全員を対象に、絵本の読み聞かせを実践し、さらにその絵本や絵本に関するパンフレットを配布しています。

平成16年度において、ブックスタート事業に参加された方々を対象にアンケート調査を実施したところ、「絵本を読んであげていることでお子さんが変わったと思いますか」という設問に対し、約90%の家庭が「変わった」と回答しています。多くの保護者が子どもへの絵本の読み聞かせやそうした時間の重要性を実感していることが分かります。

また、将来的に子どもの思考能力や創造性の発達、読書の習慣付けなどにも大きく影響を与えることも報告されており、ブックスタートの持つさまざまな機能を十分に発揮できるよう、それぞれの機関と連携を取りながら実施しています。

イ 子育て支援センター（フリースペース）では、親子がいつでも絵本に触れられるよう絵本コーナーを設置するとともに、子育てアドバイザーが子どもの年齢にあった絵本の読み聞かせを実施しています。市立図書館との連携で定期的に本の読み聞かせ会も実施しています。

また、地域7か所で月2回実施している子育てひろばにおいても、絵本の読み聞かせを行っています。

② 保育課

保育園は0歳児から就学前の6歳児の保育をしています。保育室には、0歳児の乳児期から年齢にあった絵本に触れられるよう手の届くところに絵本を置き、毎日読み聞かせをすることにより、心地良い言葉のやり取りを楽しむなど、絵本に親しむ環境をつくっています。さらに幼児期においては、乳児期の経験をもとに、昔話、物語絵本などストーリーのある絵本を繰り返し見聞きすることで、豊かな想像力をはぐくんでいます。絵本を読んでもらう楽しさを知ると、自然と子ども同士で絵本の読み聞かせをし合う様子もあります。また、子どもが自由に絵本に触れることができるように、図書コーナーを設置するなど、環境づくりに取り組んでいます。

また、保護者に対しては、子どもが喜ぶ絵本の紹介をしたり、貸し出しをする園もあったり、家庭でも積極的に本を読むように声かけをして、絵本を通して親子の絆を深め、豊かな情緒をはぐくむために役立てています。

地域子育て支援活動において、地域の乳幼児に対して保育士や読み聞かせボランティアが、絵本の読み聞かせを実施しています。

(4) 幼稚園（幼稚園協会提供）

幼稚園に就園する幼児は、基本的には満3歳児から就学前の6歳児までです。幼稚園の生活における読書活動は家庭からの延長線上にあります。園児たちの読書経験は比較的豊富で、幼稚園で初めて絵本と出会うことは少なく、すでに、家庭において絵本を読み聞かせてもらっている状況がうかがえます。

また、幼稚園に初めて参加する新入园児も、クラス全体での絵本の読み聞かせも、6月には集中する姿勢が強くなってきます。

これらを踏まえると、ブックスタート事業で乳幼児健診時に、ブックスタートパックが配布されるのは大きな効果があると思われます。

① 日々の保育での読書活動は次のようなことが行われています。

ア お話、読み聞かせ（ほぼ毎日の活動）

- ・ 読み聞かせは絵本が中心です。
- ・ 年長児には童話を読み聞かせることもあります。
（読みきれないと、継続して数日間に渡って読み継ぐこともあります）
- ・ 園によっては月刊絵本を教材に用意しているところもあります。

イ 素話・ストーリーテリング

- ・ 日常の保育の中や園外での地域活動などで行っています。

ウ ボランティアが活動

- ・ 週に一度、図書貸し出しの登録手続きの支援に携わったり、保育室や図書室などで読み聞かせを行ったり、母親ボランティアが活動している幼稚園があります。

② 図書を貸し出している幼稚園もあります。

- ・ 子ども図書館、図書室、図書コーナーなどを設置し、身近にいつも図書を用意しています。
- ・ ほとんどの保育室には、書棚やブックラックを設置し、年齢にふさわしい本がいつでも閲覧できるようになっています。
- ・ 必要に応じて、個別に絵本を読み合うこともあります。

③ ある園で子ども読書に関するアンケートをしたところ、次のようなことが分かりました。

- ・ 毎日、寝る前に家族に本を読んでもらっている……62%
- ・ 時々も含めると……92%
- ・ 自分一人でも読むは……48%

(5) その他の公共施設

公民館では、自由に絵本などを閲覧できるように図書室やコーナーを設けたり、各種講座などで子ども読書の啓発・実践をしたりしています。

一部の館では、2、3歳児を持つ親を対象に開講している幼児家庭教育学級で、子どもと絵本の関わりをテーマにした講座を実施しています。ブックステップアップ事業として位置付け、さらに全館での事業展開をしていく予定です。

青少年課では有害図書が青少年に与える影響を考え、健全な環境になるよう啓発活動に取り組んでいます。

本は心のえいようだ。

<ブックステップアップ事業の展開>

ブックスタート事業は、親子の肌のぬくもりを感じながらやさしい気持ちを通わせることを原点としながら、現在、7か月児健康相談時に実施しています。

さらに第2段階として、幼児期に本とふれあう機会を提供し、読書活動を通じて親子のつながりを深め、家庭での読書活動の推進を図ります。

具体的には、公民館で実施している幼児家庭教育学級に「子どもと本」をテーマにした講座を実施するなど、親の関心を高め、幅広い読書活動の推進に努めます。

<ブックスタート>

ブックスタートは、1992年に英国バーミンガムにおいて、すべての赤ちゃんと保護者を対象にメッセージを伝えながら絵本を手渡すことを目的に始まった運動で、2000年「子ども読書年」の推進組織「子ども読書年推進会議」によって、子育て支援策として広く全国に紹介された事業です。

赤ちゃんの体にミルクが必要なように、赤ちゃんのことばと心には、ぬくもりに満ちた中でやさしく語り合う時間が大切です。やさしい肌のぬくもりを感じながら、赤ちゃん自身が、愛されていることや守られていることを受け止め、人を信頼することや人と気持ちを通わせる心をはぐくむ大切な場面ととらえています。